

## 学会ニュースNo.89 トピックス

- ・2007年度(第62回)総会・研究発表大会のご案内
- ・地理写真展作品の募集
- ・2007年度立正地理学会評議員会のお知らせ
- ・第102回臨地研究会(三宅島)報告
- ・会員の声

## 会 告

### ○2007年度(第62回)総会・研究発表大会のご案内

2007年度(第62回)総会・研究発表大会を下記の要領にて開催いたします。

#### 記

1. 日時:2007年6月2日(土)9:20より
2. 会場:立正大学熊谷校舎6号館(6101,6102教室)  
(当日、校内に案内を掲示いたします)
3. 総会委任状について  
総会委任状は次号の学会ニュースに同封します。
4. 昼食  
学生食堂が営業しています。
5. 懇親会
  - 1)会場:立正大学熊谷校舎学生食堂(ステラ)
  - 2)会費:一般4,000円, 学生2,000円
  - 3)時間:17:00~19:00
6. 発表申込について
  - ・発表希望者は、3頁の発表申込用紙に所定事項を記入の上、2007年3月31日(土)までに集会委員会宛に送付して下さい。
  - ・メールでも受け付けております。申込用紙と同内容を記載して次のアドレスまでお送り下さい。送付先アドレス:geosoc@ris.ac.jp
  - ・発表の形式は、口頭発表とポスター発表、地理写真があります。いずれかを選択して下さい。
  - ・口頭発表は発表時間15分、質疑応答5分の合計20分です。
  - ・発表要旨集は作成しません。発表者は必要に応じて発表資料を用意して下さい。
  - ・スライドやOHPの利用をご希望の方は集会委員会までご相談下さい。
  - ・パソコンと液晶プロジェクターはこちらで用意します。プレゼンテーションソフトはWindows版PowerPoint2003です。Windowsで読み込めるフォーマットでUSBフラッシュ

メモリーに保存して、当日会場へご持参下さい。

- ・研究発表者は、研究発表要旨を必ずご提出下さい。研究発表要旨は『地域研究』に掲載いたします。『地域研究』の執筆要項にしたがってご執筆の上、大会当日に編集委員会までご提出下さい。

#### 7. 研究発表大会プログラム・会場案内について

研究発表大会プログラム・会場案内については、次号学会ニュース(2007年5月発送予定)、ならびに学会ホームページ(<http://www.ris.ac.jp/geosoc/>)に掲載いたします。

#### 8. 展示について

例年、地理関係出版社の出版案内や図書販売がおこなわれております。個人向けの展示スペースも確保しておりますので、地図等の展示を希望される方は、集会委員会までご照会下さい。

### ○地理写真展作品の募集

今年も立正地理学会総会・研究発表大会と同時に、地理写真展を開催いたします。会員諸氏が自ら撮影し、地域の特徴をよくとらえていると思われる写真の出展をお願いいたします。

出展者は2007年3月31日(土)までに2頁の地理写真申込用紙に所定事項を記入の上、集会委員会宛に送付して下さい。メールでも受け付けております。申込用紙と同内容を記載して次のアドレスまでお送り下さい。送付先アドレス: [geosoc@ris.ac.jp](mailto:geosoc@ris.ac.jp)

作品は、以下の様式にしたがって作成したものを持参し、大会当日に所定の場所へ展示願います。また大会終了後は、各自でお持ち帰り下さい。

#### 【地理写真展 様式】

- ・A1(594×841mm)の台紙をタテに使用して下さい。
- ・写真の大きさ・枚数・貼り方は自由です。
- ・キャプションには、内容・場所・撮影日時など、撮影時の状況を付記願います。(作品例)

テーマ 氏名(所属)	
写真	写真
キャプション	キャプション
写真	写真
キャプション	キャプション

2007年3月

## 2007 年度 研究発表大会 発表申込用紙

・発表者氏名・所属(共同発表の場合は, 発表者に○印をつけて下さい)
・発表題目:
・発表形式(↓いずれかを○でかこんで下さい) 口頭発表 ・ ポスター発表
・連絡先 氏 名: 住 所: 〒      — 電話番号:      —      —      ( 自宅 ・ 勤務先 ) E-mail:

## 2007 年度 地理写真展申込用紙

・氏名(所属)
・テーマ:
・連絡先 氏 名: 住 所: 〒      — 電話番号:      —      —      ( 自宅 ・ 勤務先 ) E-mail:

※申込用紙をコピーしてご利用いただくか、立正地理学会ホームページからファイルをダウンロードして下さい。

## ○2007年度立正地理学会評議員会のお知らせ

2007年度立正地理学会評議員会を下記の要領にて開催いたします。

### 記

1. 日時: 2007年6月1日(金)18:00より
  2. 場所: 立正大学熊谷校舎
  3. 議題: 1. 2006年度事業報告の件  
2. 2006年度決算報告の件  
3. 2007年度事業計画案の件  
4. 2007年度予算案の件  
5. その他(他に議題のある評議員の方は、集会委員までお知らせ下さい。)
- 詳細については、次号学会ニュースにて評議員の方に同封する出欠ハガキをご確認ください。

## ○第102回臨地研究会(三宅島)報告

2006年11月11日(土)、瀬戸真之会員(立正大学)、高木亨会員(立正大学・ORC)、山下太一会員(立正大学・研)の案内により、第102回臨地研究会(三宅島)が行われた。テーマは「2000年三宅島雄山噴火災害からの復興と課題」であり、参加者は19名であった。

今回の臨地研究会は、前日の11月10日(金)21時半に東京港竹芝客船ターミナルに集合した。2006年11月現在、三宅島内ではガスマスクの常時携帯が義務づけられており、各自、客船ターミナルの売店にて2千円程度で購入した。22時半に出港した「さるびあ丸」は翌朝5時に三宅島西岸の錆ヶ浜港へ到着した。岸壁は島へ帰ってきた島民や釣り客、その迎えの人々で賑わっていた。一行は錆ヶ浜港から宿舎の三宅島バーディへ向かい、しばらく休憩を取った後、マイクロバスで出発した。

当日は曇天で時折小雨の混じる天候となった。三宅島バーディのある神着(かみつき)は三宅島の北側に位置し、沖合に神津島や新島を望む。一行は東京都史跡に指定されている三宅島役所跡へ向かった。この建物は江戸時代後期の建築と推定され、地役人と神官を兼帯していた壬生氏の役宅であった。また、島役所跡の前庭には、樹齢約450年、高さ約23mのビャクシンの巨木がある。周辺には屋根に降った雨水を貯める仕組みの貯水槽も見られ、島内での水の貴重さが伺えた。次に神着地区の農地へ移動した。この農地は2000年噴火災害から5年間続いた全島避難の間に雑草が繁茂する荒地となってしまう、それを全島避難解除後に復興したものである。付近には社会党書記長であった故浅沼稻次郎の銅像と生家がある。

バスは島の東側へ回り、椎取神社へ向かった。椎取神社は2000年の噴火によって生じた泥流によって旧社殿や旧鳥居の下部が埋没し、新たに社殿と鳥居が建てられた。周囲には火山ガスで立ち枯れた木々が広がっていた。二酸化硫黄(SO<sub>2</sub>)などを含む火山ガスは、

現在でも雄山山頂火口から放出が続いている。三宅島では火山ガスの危険性に応じて、立入禁止区域、危険区域、高濃度地区の3種類の規制区域が条例によって設定されている。今回の臨地研究会では案内者のご尽力によって高濃度地区と危険区域への立入許可を受けた。高濃度地区では原則として立入および居住が禁止され、島民の生活上不可欠な行為などについては条件付きで立入可能となる。高濃度地区は島内で坪田と阿古の2区域が設定されている。また、危険区域は火口周辺の立入禁止区域の外側から雄山の中腹を一周する環状林道までの区域であり、災害復旧作業員以外の立入が禁止されている。一行はその高濃度地区の一つである坪田高濃度地区内に入り、1962(昭和37)年の噴火でできた噴石丘である三七山や、1940年の海底火山噴火でできたひょうたん山を車窓から望み、三池へ抜ける。三宅村役場は2000年の噴火まで三池にあったが、高濃度地区に指定されたことから三池は原則として居住禁止となり、村役場は阿古へ移転した。また、周囲の山肌が白く立枯れた木々で覆われていることから火山ガスの強さが伺えた。

一行は高濃度地区との境界部分にあり閉鎖されている三宅島空港を過ぎ、島の南部に位置する大路池とアカコッコ館へ向かう。大路池は約2千年前の水蒸気爆発で形成された周囲2km、水深30mの火口湖である。伊豆諸島最大の淡水湖であり、周辺には照葉樹林が広がっている。大路池の入り口にあるアカコッコ館は三宅村村営の自然観察施設である。三宅島は約250種もの鳥類が確認されるなど野鳥生息密度の高い島であり、その中でもアカコッコは三宅島を主な生息地とする希少な鳥である。2000年の火山災害によって森林面積の6割が影響を受けた三宅島ではこうした鳥類の生息環境も被害を受けた。

阿古高濃度地区を抜けて阿古漁港へ移動する。阿古漁港では漁港施設や伊勢エビ養殖施設を見学し、昼食となった。昼食後は危険区域に指定されている村営牧場跡と七島展望台跡へ向かう。雲の中で視界が悪く、風雨に濡れる車窓からの見学となったが、噴火前の写真と比較するなどして火山災害により荒廃した様子が確認できた。バスは再び阿古へ戻り、1983年の噴火で生じた阿古溶岩流に飲み込まれた阿古小中学校跡を見学、伊豆岬を経て、伊豆避難施設に向かう。伊豆避難施設は脱硫装置を備えた火山ガス放出時の避難拠点である。隣接してヘリポートがあり、当日のヘリコプター最終便の離発着風景を見学した。その後三宅島バーディへと戻り、今回の臨地研究会は終了となった。

また、翌日は三宅勤労福祉会館において第30回秋季例会・第35回講演会が開催され、2件の研究発表と2件の講演がなされた。講演会終了後、帰りの船は風と波の関係から三池港に接岸した。雄山の風下となった三池には火山ガス注意報レベル2(高感受性者警報)が発令されていた。船着き場は島民の他、週末を三宅島で過ごした観光客や釣り客など多くの人々で賑わっていたが、刺激臭に覆われ、ガスマスクを装着する人もみられた。船は波浪により若干遅れて竹芝棧橋に到着、第102回臨地研究会(三宅島)は解散となった。

三宅島では2005年5月から観光客の受入れを開始している。会員諸氏もぜひ一度、三宅島を訪ねてみては如何だろうか。最後になりましたが、現地でご手配下さいました案内者の方々に記して厚くお礼申し上げます。(集会委員:山田淳一)

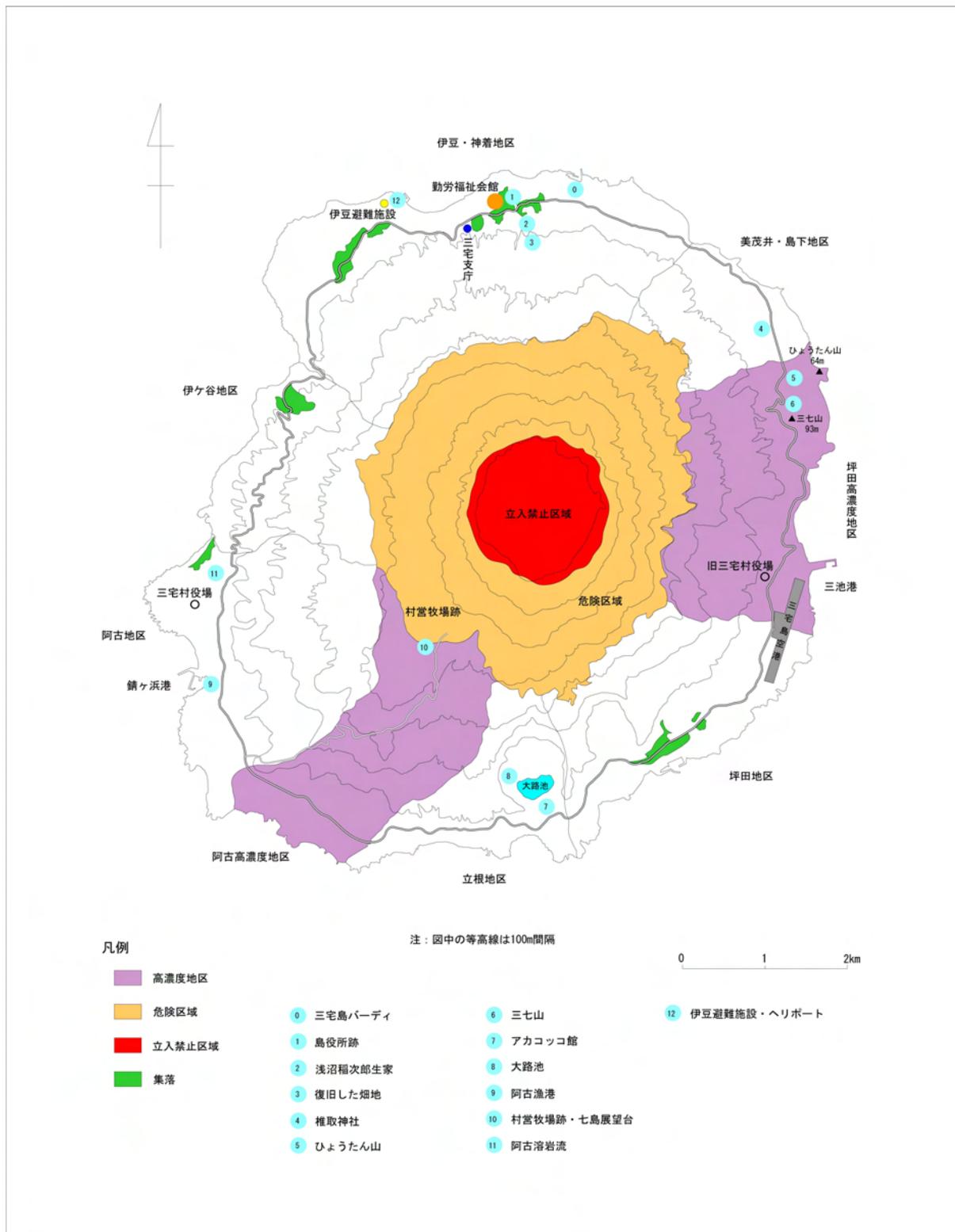


図1 三宅島の概要と巡検コース（山下太一会員作成）

2007年3月



写真1 三宅島伊豆岬での巡検風景(瀬戸真之会員撮影)



写真2 講演会・研究発表会会場での記念撮影 (高木 亨会員撮影)

## ○会員の声

### ■三宅島臨地研究会に参加して

私にとって三宅島に行くことは、この臨地研究会によるものが初めてであり、事前知識は平成12年の噴火災害による全島避難が約5年間続き、平成17年2月の避難解除から災害復興へ向かっているという程度のものであった。

フェリーを降り、三宅島に上陸した時にすぐ硫黄臭を感じ、現在も火山活動が続いていることを実感させられた。また臨地研究会では、数々の噴火災害の爪痕を目の当たりにした。火砕流による椎取神社の鳥居が埋没している様子のほか、火山ガスが頻繁に流れてくる高濃度地区では家屋のトタン屋根などの金属部分が溶けて廃墟のようになっていたことに驚かされた。

まさしく「百聞は一見にしかず」である。この臨地研究会に参加してはじめて三宅島の噴火災害の一端を理解できたように思う。また三宅島の住民は火山と共生して災害復興の道を歩もうとしていることを学べてよかったと思う。案内者の先生方のわかりやすい説明で心に残る臨地研究会であった。また機会を見つけて今度は個人で三宅島に行ってみたいと思っている。(福本琢之・鳥取城北高等学校教諭)

### ■現地を知ることの重要性

私立学校の教員になってから、はや八年。普段から地理には携わっているものの、なかなか様々な場所に行き調査を行なうことができなくなってしまった私だが、研究会の存在は「もう一度原点に戻って現場を見てみたい」という気持ちにさせた。

私は、普段から授業の中で生徒たちに対し、「現地を知る」ことの重要性を強く言い続けている。これは様々な発見をすることができるからである。そして、これこそが地理の楽しみ方の一つではないかと私は考える。

研究会に参加後、授業の中でこの研究会の話をする、生徒たちは興味を持って熱心に聞いていたようである。島民の生活の変化・自然との共存・将来への対策など、自分たちとは異なった生活を余儀なくされている状況を知ることができたであろう。そのことが生徒たちに現地を知ることの重要性として少しでも感じ取ることができたなら、私の参加した意図が達成されたのではないかと思う。(三浦慎一郎・立正中学校・高等学校教諭)

### 編集後記

三宅島で開催された臨地研究会は、盛況のうちに終了しました。災害からの復興途上にある三宅島民を支援する方法は色々ありますが、その一番単純な方法は「観光に出かける」ことです。人間が島に近寄らなかつた間に魚が大きく成長したため、大物狙いの釣り人は早くから災害復興に一役買っていたようです。魚にとっては受難の時が再びやってきたということでしょうか。会員の皆様もぜひ一度三宅島を訪れてみてはいかがでしょうか。(編集委員・小松陽介)

## 立正地理学会ニュース No.89

2007年3月5日発行 編集者 立正地理学会編集委員会

発行者 立正地理学会 〒360-0194 熊谷市万吉1700 立正大学地理学教室内

電話 048-539-1660 振替 00130-8-13453